

ものづくり産業を支える仲間たち③②

電機連合一NEC埼玉



NEC埼玉社屋

今回は、電機連合加盟の企業、埼玉日本電気株式会社 (NEC埼玉) を訪問させていただいた。東京の都心部から80キロメートルの位置にあり、東京駅から上越新幹線で約50分の本庄早稲田駅から車で約10分のところにある。上毛三山の赤城山、妙義山、榛名山に抱かれた自然豊かな土地で、工場の食堂からはその三山が一望できる。

埼玉日本電気は1984年1月にNECの生産拠点として設立された。事業内容は携帯電話の開発・設計・製造をメインに行なっている。設立当初は自動車無線・パーソナル無線機を製造していたが、時代が携帯電話にシフトしたことを受け、1987年5月に携帯電話の生産を開始したのを皮切りに、現在に至るまで25年間、一貫して携帯電話の



1階にあるショールーム

開発・設計・製造を行いつづけている。現在、年間100万台を生産しており、本年前半で携帯電話製造1億台を達成すること。従業員は802人 (2012年1月末時点) で、パート・派遣を含めると1500人強の方が、携帯電話の新モデルの開発・設計・製造に一致団結して従事している。

1995年に携帯電話が販売自由化となり、1999年iモードサービス開始、2002年カメラ付き携帯発売と多機能化が進む中で、当初の折りたたみ式はNEC独自技術であった。

2010年6月1日に、NECの携帯電話端末事業部門とカシオ日立モバイルコミュニケーションズの統合によりNECカシオモバイルコミュニケーションズがスタートし、急速に普及しているスマートフォンなどへの対応を図っている。

今の主流となってきているスマートフォンの製造ラインを見せてもらったが、目に付いたのは女性労働者の多いことだ。きめ細やかさを要求される精密加工をテキパキとこなしていた。スマートフォンはデジタル部品など約1400から成り立っており、装置組立ラインでは1ライン15人体制で、一人約10点の部品を36秒で組み立てるといふ凄技で、1日750台を組立・検査・梱包まで行っている。表紙イラストは、スマートフォンの製造ラインで、精密な部品を組み立てる女性労働者を描いている。人一倍正確さとスピードが要求される。生産ラインは、消費者ニーズに応え、より高品質で迅速な商品の提供を実現するため、徹底的なムダ (動作・運搬のムダ、停滞のムダ) の排除



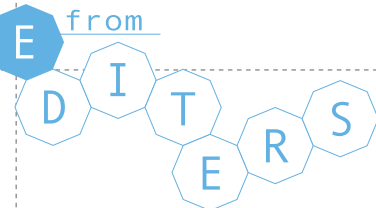
スマートフォンの製造ライン

を行なった生産革新活動を展開中。表示部組立、部品実装、装置組立のラインの各工程において、随所で品質検査を行ない、早い段階で不良を発見し、高い品質を維持する取り組みを行なっている。

また、NEC埼玉では、単に仕事のスピードだけを優先するのではなく、創造性と個性豊かな社員の育成のため、社員の主体性が生かされる職場づくりを行っている。そのため、顧客の満足と従業員の満足を常に考え、人に優しい携帯電話生産ラインの構築に努めているとのこと。作業員によるライン改善提案を定着させることを狙った取り組みとしてライン作業員が作業の流れを疑似体験できる「ものづくり道場」を2008年から実施している。製造ラインの女性労働者の方々のきびきびとした中にも、生き生きと誇りを持って仕事をしている姿が印象に残った。

1階にあるショールームでは同社で25年間生産してきた携帯電話が生産年代順に円状に並べられていた。改めて、3キロのショルダー型携帯電話から今の極薄のスマホまで我々の快適な生活のために、開発・設計・製造を弛まず地道に続けてこられた方々に心から感謝しつつ同社を後にした。(美)

紹介した。◆最近ある本に、組織の将来を見るときは、その内部の人間関係を見ればよくわかるとあった。人間関係が良い組織は伸びるし、上司と部下が、部下同士がいがみ合ったり、足を引っ張りあっている組織はやがては衰退していくとのこと。日本のものづくりの強さは昔から「チームワーク」にあったことを忘れまい。(美)



◆東日本大震災から1年が過ぎた。まだ、瓦礫の撤去も放射能の影響を懸念し引き受け先が決まらず、90%以上が現地に山積みになったままだと

日独交流150周年と奇跡の日本人



IMF-JC 事務局長  
若松 英 幸

ドイツ人の一家を津波から救い、無事に祖国に送り届けた人々が「奇跡の日本人」と呼ばれ、ドイツで大反響を呼んでいる。シュピールベルクさん一家は、娘さんの結婚式を前に日本旅行を計画、父の好きな浮世絵に描かれた日本三景「松島」を旅行中の電車内で地震に遭遇、タクシーで仙台に避難する途中に巨大津波に流された。民家のフェンスに必死でしがみついていたが、力尽き濁流にのまれようとした瞬間、やはり津波で流されてきた庄司さんという男性に手をつかまれ、民家に引き上げられた。彼はドイツ人一家を調理台の上に押し上げ、自分は瓦礫で負傷しているのも構わず、布団を探してきて掛け、水につかまま一晩中「頑張ろう、頑張ろう！」と声をかけ続けた。一家はその声に励まされ、寒さと恐怖の中を生きながらえることができた、と語っている。

避難所の人々は、言葉の通じない一家を4日間懸命に世話してくれた。偶然出会った羽賀さんは、自分の車で長く遠い雪道を新潟まで送っていったが、途中でガソリンが無くなって知人宅に連絡、知人は暖かい風呂や食事でもてなし、翌日一家を東京行きの新幹線に乗車させた。すべてを失い困窮する家族に3万円を手渡してくれた人、原発事故で東京を離れたドイツ大使館と懸命に連絡を取りバスポート発給に尽力してくれた人、様々な人々の善意のリレーで、一家は無事帰国することができた。

この話はドイツのテレビZDFで放

映され、大反響を呼んだが、娘のヨハンナさんは「暖かい日本人の心と、新潟へ向かう途中の、一面の雪景色は決して忘れることができない」と涙ながらに話していた。2011年は日独交流150周年の記念すべき年だったが、その記念誌によると、ドイツからの義援金は60億円を超えており、いまま増え続けているとのことである。我々の友好組織IGメタルも、1400万円もの義援金を即座に送ってくれている。

IGメタルのフォーバー会長 (IMF会長) は2月初旬、日独定期協議のため来日されたが、震災の復興状況視察と現地の仲間との懇談を希望され、連合宮城とJFE条鋼仙台製造所を訪問した。連合宮城では、震災当時の被害状況や連合ボランティアの活動状況がビデオで紹介され、その後、松島から船とバスで仙台港の突端にあるJFE条鋼仙台製造所に向かった。あたり一面廃墟と化し、敷地には未だに巨大な貨物船が放置されて津波の痕跡が残る中で、操業は再開されていた。壊滅的な被害から半年余りでの操業再開に対し、ドイツ側から、「費用はどうしたのか」「従業員はなぜそこまで献身的に努力できたのか」といった多くの質問が寄せられた。

工場の製品は、自動車の基幹部品の鉄が60~70%を占めており、顧客に迷惑を掛けられないことや社会的な責任を果たすことなどから、融資を受けてでも操業を再開すると決定したこと、全国の事業所に応援を求め全社一丸となって再開に努めたこと、一部の管理職以外はすべて地元採用の社員であり、工場が再開しないと雇用に重大な危機

が生じること、そうしたことから求心力やモラルが高いこと、といったことが説明された。

日本のものづくりを支えるハイテク素材・部品メーカーが、韓国への投資を加速している。韓国メーカーは急速に世界シェアを拡大しており、安定した販売戦略が描ける上、ウォン安、欧米との自由貿易協定、電力をはじめとするインフラコストの安さなど、日本の国内ものづくり産業が直面する多くの阻害要因がない、という魅力となっている。

しかしながらわが日本も、災害への緊急対応や復興など、いざ方向が決まれば、チームワークや現場力を発揮して、すさまじいパワーを発揮する。これ以上の産業の空洞化を阻止し、日本での雇用を維持するため、新成長戦略の着実な実行による成長産業への事業構造転換、震災後の新たな資源エネルギー政策の確立、社会保障・税の一体改革における社会保障の姿の明確化などにより、安心して暮らせる国づくりに邁進し、日本人の誇るチームワークが発揮できるようにしていかなければならない。2012年闘争も山場を越えたが、労使が創り上げてきた定昇制度やたゆまぬ「人」への投資が、ものづくり日本が誇るチーム力・現場力の源泉であることも再認識しなければならない。



津波で乗り上げた巨大な貨物船の前で。IGメタルの代表団と共にJFE条鋼・仙台製造所にて。